

柔 道 連 盟

沿 革

昭和55年10月19日に柔道連盟は、創立10周年の記念式典と、記念大会の第8回東部十勝少年柔道大会を併せて開催した。大会成績は中学生団体が3対2で上浦幌チームを破り優勝、個人戦は小学6年の道下訓史と中学3年の長内繁がそれぞれ優勝した。また、記念祝賀会も午後5時から町内の寿々半において行われ、管内の柔道関係者や町長など多勢の関係者が出席した。

11月2日に札幌で開かれた第12回全日本新人体重別柔道選手権大会北海道予選では、全幕別OBの梶本敏文3段が71kg以下級で見事に全道2連勝を飾った。また、同じ道警本部機動隊で全幕別OBの岡誠治3段が全道警察署対抗の逮捕術大会で団体優勝し、全国大会に出場するなど先輩達の活躍が目立った。

歳も明けて昭和56年1月、もはや安定した力を持った全幕別の選手は、第25回の全十勝鏡開き柔道大会で中学生の長内 繁が優勝、高橋弘泰が準優勝、吉田茂利が第3位と上位を独占した。この記録は12年前の第23回大会で全幕別の選手が2段以上の部で上位独占をして以来2年ぶりの快挙であった。7月23日、札幌商業高校柔道部が来町した。青少年会の道場には今まで柔道世界チャンピオンの上村春樹選手（旭化成）や東海大学第四高校柔道部（札幌市）それに市島道場選手団（東京都）など全国各地から柔道関係者が訪れている。札商柔道部が幕別を訪れるのはこれが初めて。今回の訪問は2月、金野 忠監督が外部との交流を呼びかけて書いた原稿が柔道の専門誌「近代柔道」に掲載され全国に紹介されたのがきっかけ。青少年会館の道場にバスで乗りつけた一行は、6時から稽古開始となり、地元の少年団や幕別高校、池田高校、帯広三条高校の柔道部員など30人余りが約2時間に亘って練習を行った。

さて、全幕別は柔道による外交を繰り広げる為、第1回東京遠征を昭和56年8月6日から10日まで行った。今回の東京遠征は、昭和54年に東京都目黒区にある市島道場が少年達（総勢約40名）を十勝に送った。これを機会に交流を深めようというのがねらい。小学生、中学生の合計6名が遠征を行った。7日は市島道場で交流練習、午後からはホームステイを実施するため各自が、市島道場に通っている子ども達の家に向った。8日は午前10時より目黒区立体育館において交流試合を開催。会場講道館より米山先生、そして金野監督の友人で柔道世界チャンピオンの上村春樹6段（全日本強化コーチ、明治大学助監督）、広井武司先生（国学院大学監督）などがご出席された。午後からは、講道館、明治大学の練習を見学、9日には自由行動とし、10日は午前10時に目黒区役所を訪れ、塚本区長を表敬訪問した。そして午後1時、羽田を後にして空路帯広へと飛んだ。

その後、昭和58年8月8日に再び市島道場選手団一行（約50名）が来町し交流を行い、全幕別は第2回の東京遠征を昭和60年7月29日から8月2日まで実施し、講道館、国会議事堂、地元選出の国会議員で衆議院議員の鈴木宗男事務所を訪れ表敬訪問を行い、また、日本武館、新宿副都心などを見学した。遠征をした少年達にとっては最高の夏休みであった。更に昭和62年には、目黒区柔道少年団として選手団約40名が3回目の北海道遠征を行い、来町した。また、目黒区長と幕

別町長との親書交換がその都度行われ、柔道外交は思わぬところで自治体にも貢献している。

昭和56年9月13日、帯広で全道高校柔道大会十勝地区予選が開かれ、全幕別OBで帯広三条高校1年の高橋弘泰選手が重量級で第3位と健闘した。同年11月1日には本別町立武道館において第9回東部十勝少年柔道大会が開かれた。当日は全幕別、池田、浦幌、上浦幌、本別の各チームが出場し団体、個人戦に熱戦が繰り広げられた。全幕別の選手は団体・個人共に大活躍した。

昭和57年9月22日、上村春樹6段が4度目の来町となり、午後4時から青少年会館で柔道教室が盛大に開かれた。当日、会場には山田会長、福田教育長、安部理事長、など関係者多数が、そして小、中、高校生の選手など60名近くが参集した。午後6時すぎには池田柔道少年団団長が金野監督に上村6段の池田来町のは要請を既ねてから行っていた事により、池田町総合体育館へ向い池田町でも柔道教室を開いた。その後、上村6段は、昭和62年8月4日～5日に5年ぶり5度目の来町となり、4日午後7時より帯広グランドホテルにおいて、十勝柔道連盟会長、内木宮多良氏、十勝東部方面柔道指導者協議会の会長に昨年就任した、上村7段の友人、金野忠氏らと懇親会が開かれた。

今回の来町は、8月2日～4日まで赤平市で開催された全国高校総合体育大会柔道競技に来賓として来道した際に幕別、帯広まで足をのばしたもの。上村7段はモントリオールオリンピック無差別級金メダリスト、世界柔道選手大会無差別級優勝、全日本柔道選手権大会2回優勝など現役時代には、国内国際大会のほとんどを制するなど日本を代表する人物で、現在は全日本柔道連盟強化ヘッドコーチ、明治大学柔道部監督、旭化成東京本社広報課長、そして全日本の監督として世界大会などに選手を引率するなど、世界を飛び回っている。

上村7段は懇親会の中で「基本を大切にした青少年の指導と情熱を持った指導者の育成」などを強調。また、来年のソウルオリンピックに向けた全日本の取り組みや斉藤、正木ら日本の一線級選手の練習ぶりなどについて説明しながら優れた選手を中央に送り出す各地の指導者の健闘をたたえた。

翌5日には幕別町を訪れ、二川勝美教育長を表敬訪問、その後中央保育所を訪れ、園児、保母さんらと記念撮影を行い、再び帯広に戻り、金野監督らと共に十勝毎日新聞社々長、副社長らと懇談し、JR帯広駅のアサヒビール園のレストランで昼食を取り、帯広空港へと向った。そして午後1時すぎの飛行機で帰京した。

昭和58年1月16日帯広市総合体育館において第27回全十勝鏡開き柔道大会が開かれた。出場選手は十勝管内から460人と強豪がそろい、その内、全幕別からの出場選手は21名であった。その結果、小学5年生の部で山口選手（札南小）が第3位、中学1年生の部では岡田選手が準々決勝進出、同2年生の部では道下選手が決勝まで進出し準優勝を飾った。

7月17日、砂川市体育館で行われた国民体育大会北海道予選で71kg級に出場した全幕別OBで道警本部の柁本敏文3段が見事に優勝し、国体へ出場した。昭和58年度第4回強化練習が9月19日から30日まで毎週月火木金に青少年会館で行われた。各選手はランニング、ダッシュ、うさぎ飛びなどハードトレーニングをこなし連日の練習に汗を流した、10月9日第11回東部十勝少年柔道大会は池田町総合体育館において約80人の選手が参加して盛大に開かれた。その結果、団体戦では小学生の部が第3位、中学生の部が準優勝の成績を収めた。また、個人戦では道下が期待通りの活躍を見せ黒帯選手を2人破り、初段から2段クラスの力を見せつけ優勝した。

小学1～2年生の部では高橋宏之選手が初出場ながら準優勝の成績を残した。11月20日第13回全幕別ジュニア柔道選手権大会（主催全幕別柔道連盟、主管、十勝柔道連盟幕別支部、後援、北海道新聞社、北海タイムス社、十勝毎日新聞社、東北海道新聞社、町教育委員会など）は、幕別町青少年会館において開かれた。その結果、小学生低学年の部では瀬上英克選手、高学年の部では早坂征祐選手がそれぞれ初優勝、また中学生の部では道下訓史選手が決勝で岡田全博選手を大外刈で破り、全幕別史上、初めての3年連続優勝を果たした。

昭和59年1月29日、十勝柔道連盟主催の臨時柔道昇段審査会で道下訓史選手が見事1回で審査に合格し黒帯となった。中学生で初段に合格したのは梶本敏文選手について2人目。5月、この頃、講道館は創立百周年を記念して特別昇段者を発表した。その内、全幕別では会長の山田栄氏が3段に昇段した。10月14日、第8回北・北海道少年団柔道大会は、音更町にある緑南中学校において開かれた全幕別は、この試合に小学生の低・中・高学年の各団体と中学生の団体、個人戦に出場した。その結果、2年生を主力選手とした低学年チームが順調に勝ち進み第3位となった。今回の成績は昭和52年に釧路市で開かれた東北海道大会準優勝に次ぐ好成績である。低学年チームの選手は、まず監督に金野 忠3段、選手・佐々木隆、鈴木拓磨、平澤和勝、喜多 慎、中山典征の5名であった。

10月21日、第12回東部十勝少年柔道大会は幕別町トレーニングセンターで行われた。参加チームは池田、本別、幕別（浦幌は棄権）で合わせて9チーム、約50名の選手が出場した。開会式は10時10分に始まり最初に山田栄大会長があいさつ。続いて名誉大会長の林照男幕別町長、副大会長の福田教育長、大会顧問の大川原勝彦、十勝柔道連盟副会長らが次々と祝辞を述べた。前年度優勝チーム（小・中）の池田少年団から優勝旗の返還のあと試合に入った。この大会は全幕別が抜群の強さを見せつけ、その結果、小学生団体は全幕別Aが優勝準優勝は池田B、第3位は本別と池田A、中学生団体は全幕別Bが優勝、準優勝は池田、第3位は幕別Aと本別、全幕別は小・中共アベック優勝を飾った。一方、個人戦では小学3年生の高橋宏之選手が、同5年生では有沢耕二が格差で、そして中学2年生で笹島秀彦が、同3年生では安定した実力のある岡田全博が黒帯の選手を優勢で破り、それぞれ優勝した。11月18日、第15回全十勝少年団柔道大会は、清水中学校体育館で開かれ、中学2年生の部で今福聖嗣選手が堂々3位になった。

昭和60年1月13日、第30回全十勝鏡開き柔道大会は帯広市総合体育館で開かれ、小学3年生の部で高橋宏之選手が第3位となり、そのほかの選手もほとんどが3回戦まで進出した。十勝管内のレベルは相変わらず全道一であり、このような中で安定した実力を示した全幕別の各選手は大変りっぱである。

昭和60年4月、全幕別柔道連盟常任理事で帯広警察署勤務の道下道夫3段が旭川方面美深警察署に警部補として栄転した。5月23日、全幕別柔道連盟総会が町内で開かれた。この中で、江陵高校柔道部の連盟加入の申請があり、全会一致で承認された。また、この友は連盟創立15周年の記念の年にあたり総会終了後には、同連盟顧問の新田彰生氏（50）と評議員の小林繁郎氏（74）が功労者として表彰され、山田 栄会長から表彰状と記念品が贈られた。次にこの総会で役員の改選が行われ、初代理事長の安部政夫氏が副会長に、副理事長の佐々木氏が理事長にそれぞれ選任された。7月28日第7回全北海道少年柔道大会（主催・北海道柔道連盟、北海道新聞社、主管・札幌柔道連盟、北海道新聞社、札幌柔道連盟）が札幌中島体育センター別館で開かれた。本大会

には小学生団体が58チーム、中学生団体が43チーム、個人小学生は57名、個人中学生は48名が参加して、それぞれ全道一をめぐり試合に臨んだ。今回、全幕別は小学生チームと小中の個人戦それぞれ1名ずつ出場した。個人戦は振るわなかったが、団体戦は初めて準々決勝まで進出した。全幕別の選手は翌日、東京遠征に出発するとあって全員一丸となって頑張った。十勝からは9チームが進出した。結果は帯広が優勝し、ベスト8に進出したのは全幕別と上士幌だけであった。9月22日、第9回北・北海道少年団柔道スポーツ大会は、上士幌町スポーツセンターで開かれた。その結果、小学生低学年の部の個人戦で中山典征選手が順当に勝ち進み第3位に入賞した。そのほかの選手も3回戦、4回戦など勝ち進み全幕別の一定した力を見せつけた。10月20日、第13回東部十勝少年柔道大会は、本別町柔剣道場において開かれた。参加チームは、小学生、中学生の団体8チーム、約80人が出場した。その結果、昨年、小学生団体と中学生団体が優勝した全幕別は、今大会で小学生の部が2連勝し中学生の部は第3位に入賞した。小学生の部は選手5人の内4人が7月に札幌で開かれた全道大会に出場した選手で占めた為、予想どおりの強さを見せつけた。10月27日、第15回東北海道柔道スポーツ少年団柔道大会は午前9時より、釧路市厚生年金体育館で開かれた。全幕別は過去において本大会で準優勝した実績がある。今回は6年ぶりの出場であった。結果は、小学生低学年の部、高学年の部ともに予選リーグを勝ち進み決勝トーナメントへ進出した。決勝トーナメントは、結局、小学生低学年の部が準決勝、音更の越谷道場と対戦し、3対2で惜しくも決勝戦進出とならず、第3位となった。

昭和61年1月12日、第31回全十勝鏡開きを柔道大会は、帯広の森体育館において開かれた。午前9時30分より開かれた大会には約500人の参加があり、新年はじめての大会で熱戦が展開された。成績では中学3年生の部で今福聖嗣選手が決勝まで進出した。

さて、柔道連盟では、早くから町立武道館の建設についてその構想を打ち出していた。大石忠夫氏が幕別町長時代、既に武道館の青写真が出来上がっていたが、それがいつのまにか実現に至らなかった。福田省市氏が教育長時代にも教育長自身が世界チャンピオン、上村春樹氏が来町の際に、柔道教室のあいさつの中で明らかに武道館ができる旨、お話があったがこれもうやむやにされてしまった事もあり、町理事者に対する不信がつのっていたのである。このような町側のやり方に対し、柔道連盟では各武道団体に具体的な行動を起すなど、町と町議会に対し陳情活動を行う事になった。最終的に、全幕別柔道連盟は柔道後援会と協議をした結果、後援会長の高橋道宏氏らが中心となり、2月26日に幕別町長、町議会議長に対し積極的な陳情活動を行った。当日は柔道連盟より安部政夫副会長、佐々木房男理事長、後援会側からは高橋道宏後援会長、桑原信雄副会長、角田美代子事務局次長、早坂恵子理事ら6名が林町長、山崎議長に陳情書を手渡した。陳情書の団体名は、柔道連盟会長、山田 栄。剣道連盟会長、大久保正司。柔道後援会長、高橋道宏。剣道少年団後援会長、藤嶋幸雄。幕別空手父母の会会長、金野 章の各氏である。その後、この陳情書は議会において採決された。議会においても、これより早く千葉幹雄町議会議員が武道館建設に対し一般質問を行っており、また、62年9月の定例町議会では山崎長一議員が、町理事者に対し武道館の早期建設について強くせまり、ねばり強い質問を行った。その結果、林町長は64年～65年の実現に回答を出した。今度は、ほんとうに実行して頂きたいものである。

昭和61年6月22日、帯広の森体育館で開催された第30回全十勝少年柔道大会は、小学生低学年の部団体戦で全幕別が順調に決勝まで勝ち進んだが、広尾Aチームと対戦し惜しくも優勝をのが

した。(対戦したチームは次のとおり、1回戦、越谷道場A、2回戦、大正A、3回戦、上士幌、準決勝、大樹)。十勝管内の小学生、中学生の実力は常に全道一でレベルが高い。また、広尾が全国大会で3位に進出した結果からは、全国的にも十勝はレベルが高くなってきている所から、本大会での決勝進出は、全幕別の強さを示したと見られる。7月27日、第8回全北海道少年柔道大会は、札幌中島体育センターにおいて、小学生団体56チーム、中学生団体38チーム、小学生個人、55人。中学生個人、42人が出場した。大会前日に札幌入りした選手一行は、早速、宿泊先のホテルに入り、夕方、すすきの大通りにある焼肉店でスタミナをつけ、次の日の試合に備えた。この大会では昨年も小学生団体が準々決勝まで勝ち進むなど好成績を収めた。また、個人戦では、山根忠彰選手が初出場ながら圧倒的な強さで準々決勝まで勝ち進んだ。(団体戦成績、1回戦、対石川道場(札幌)に4対0。2回戦、石狩南町に4対1。3回戦、北見錬心館に3対2と破り、準々決勝は対広尾戦となり4対0で敗退した。)9月28日、池田柔道連盟など主催の第14回東部十勝少年柔道大会が午前10時より池田町総合体育館において行われ、団体戦では、全幕別が3年連続優勝を成しとげた。この大会には、池田、幕別、本別、足寄から合わせて百人が出場した。柔道連盟には指導研究部会があり、9月3日、町内で研究部会(会長、金野 忠)が開かれた。当日は金野監督以下、佐々木助監督、横山強化コーチ、飯沢強化コーチが出席して、練習内容の統一、審判規定の研究などが行われ大きな成果が得られた。全幕別では毎年、強化練習を実施しているが、この強化練習には地元の選手らもちろん管内からも高校生や中学生が参加している。特に町内からは幕別高校、江陵高校などの選手が道場に訪れ稽古に励んでいる。そうした高校生の大会、第30回全十勝高等学校柔道新人大会が、昭和61年10月5日午前9時より開催された。審判員として柔道連盟から佐々木房男5段、金野 忠3段が出席した。試合の結果、柔連の道場に稽古に通っている笹島秀彦選手(幕別高校)が軽量級で第3位、今福聖嗣選手(幕別高校)が軽量級で準々決勝、高井康人選手(江陵高校)が中量級で準々決勝と、それぞれ進出した。

さて、全幕別柔道連盟と交流を続けている京都目黒区「市島道場」で10月4～5日、目黒区民まつりが行われた。この第10回目黒区民まつりの記念行事として、市島道場が幕別産いもの試食コーナーを出店した。これには大豊の小林信治さん(現、柔道後援会長)からメークインの提供があり、9月下旬、東京へ送られた。目黒区の人達も、この試食コーナーに多勢、押し寄せ大成功の内に終了した。これがきっかけとなり、翌昭和62年10月3～4日に、今度は幕別町観光協会が主体となり、目黒区民まつりの会場のうち、向原住区センターで「まくべつ物産展」を開く事になった。柔道交流が縁でこのような行事が一大発展していく事になった。

昭和61年11月2日、本別町柔剣道場で、第1回本別・幕別柔道技術交流練習会が初めて開催された。これは全幕別の金野 忠監督の発案で企画されたもので、全幕別からは選抜選手7名が参加し、本別側からは25名の選手が集まり互いの乱取練習の後、練習試合が繰り広げられた。今後も相互の技術研究の一環として続けられる。昭和62年3月27日、東洋水産株式会社の主催による第1回北海道少年柔道大会が札幌中島体育センターにおいて開かれた。この大会には全道各地から、小学生団体55チーム、中学生団体39チームが出場した。試合は、まず3チームずつ13ブロックに分けられ予選リーグが行われた。全幕別はこの大会に中学生の選抜選手5名(小林信也③、高木健一③、有沢耕二②、角田勝茂②、山根忠彰①、監督、金野 忠)が出場した。その結果、予選リーグ1回戦は岩見沢を3対1で破り、2回戦は芦別を3対1で畳に沈めた。結局、第10ブ

ロックの決勝トーナメント進出チームは全幕別となり、そのまま勢いに乗って勝ち進むかと思われたが、決勝トーナメント1回戦は釧路共栄チームと対戦したが、ねばりの柔道で戦った釧路共栄が5対0で全幕別を破り、中学生団体の決勝戦は、この釧路共栄が5対0で全幕別を破り、中学生団体の決勝戦は、この釧路共栄が琴似（札幌）を3対1で破り優勝した。

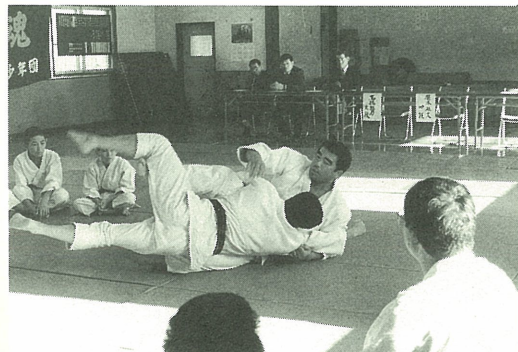
昭和62年度の柔道連盟総会の席上において山田栄会長が「会長辞表届」を安部政夫副会長に提出した。突然の辞表提出に役員もとまどう場面もあった。山田氏は挨拶の中で80歳に近くなり、そろそろ後進に道を譲りたいと引退を表明した。また、山田氏は昭和44年から18年間、当柔道連盟会長を務めた。後任の2代目会長には副会長の安部政夫氏が選任された。安部氏は戦後、途別において柔道の修業に励み、また、数多くの試合にも出場した。そして連盟の理事長、審判部長、総監督をつとめた。

昭和62年9月23日は、足寄町で第15回東部十勝少年柔道大会が開催された。足寄町では過去において、このような大きな大会は開かれた事はなく、秋季祭典と併せて盛大に行われた。この大会には十勝東部の各町から約150人の小・中学生選手が参加、熱の入った試合を繰り広げた。その結果、団体では小学生低学年の部で地元、足寄チーム、高学年と中学生ではともに全幕別Aチームが優勝した。高学年はこれまで東部大会4年連続優勝をなしとげた。

さて、十勝柔道界史上はじめて、柔道指導者協議会が設立された。これは昭和61年11月29日午後6時より幕別町内「寿々半」において、全幕別柔道連盟の金野 忠監督の呼びかけに応じた十勝東部方面の柔道指導者12人が参集、まず設立準備会が開かれ、発起人の金野 忠監督から関係資料などに基づき設立の目的などの説明が行われた。設立の主旨などについて全員の賛同を得て、12月14日に本別町において総会が開催された取材をした。十勝毎日新聞社は、この設立のもようを大きく取り上げた。団体名は十勝東部方面柔道指導者協議会とし、会長に金野 忠（幕別）を選出。協議会の目的は柔道指導者の指導力の進展改善に資するため、指導者相互の連帯と資質向上ならびに指導活動の促進方策について協議することを目的とした。これからの協議会の一大発展を期待する声が各方面から寄せられており、全日本柔道連盟の上村春樹、強化ヘッドコーチも強い関心を示している。



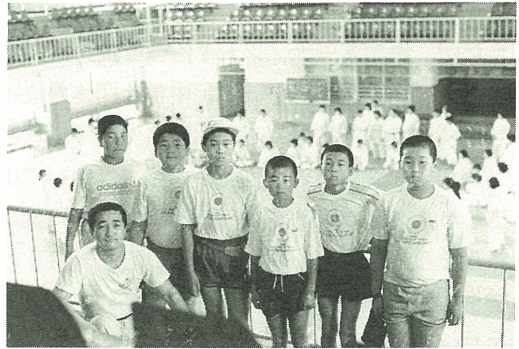
高橋政男 6 段を迎えての研究大会



高橋 6 段の実技指導



第1回東京遠征



第2回東京遠征



上村春樹 7段が来町



第9回全道少年柔道優勝大会に参加した子どもたち